

私の戦争体験記

寒川町支部 高橋 春吉

「紀元は二千六百年、ああ一億の胸は鳴る」昭和十五年神国日本の歴史を我々は、胸を張ってお祝いをしました。時すでに日支事変の真只中で私の兄も中支に出兵中でした。

私は少学校を卒業し、海軍航空技術廠に入廠し、その養成所に入り寮生活を致しました。此処は当時我が海軍が世界に誇る、零式戦闘機を作りあげた海軍の工作庁でした。その技術員を養成する為の施設です。従って、規律の厳しい寮生活の中で勉強と実習に励みました。そして、二年間の課程を修了して昭和十八年海軍工作科予備工作兵として横須賀海軍第一海兵団に入団しました。以後新兵教育を経て海軍工作学校に進み実技を習得、左の腕に桜のマークを戴き、ここで二階級の特進をし一人前の兵隊となりました。今思えば、満十七歳の可愛い兵隊さんでありました。

そして、いよいよ実施部隊に配属です。私は仲の良い同僚と別れて、厚木航空基地の三〇一航空隊に入隊しました。この部隊は、一名小園部隊と云い零式戦闘機百機を擁する進出部隊でした。軍人としての初めての働き場所です。進出部隊故にすべての事に気合が満ちており、その闘魂精

神の注入教育は厳しいものでした。毎晩整列があり、精神棒がうなりを立てて尻を叩かれたものでした。

やがて此の部隊は、先発、本隊と南方に向かって進出しました。私は残務整理のため後発隊として進出命令を待機していましたが、一向に其の気配がなく、その内に横須賀航空隊において再編成とのことでした。後で聞いた話では、三〇一航空隊はレイテ島に向かって進行中全滅したとのことでした。

今度の部隊は、南方海軍航空と称し、日本の全知全能をかけた最新鋭機「雷電」を保有する部隊でした。私達は海軍でありながら第三種軍装に身を固め、身も心も凛々しい気概に包まれた進出部隊です。厚木基地で送った「ゼロ戦機」も今、又送り出す「雷電」の若きパイロットも死をものともせず勇躍、私達が帽子や手を振って送る前を南に向かって飛び立ったものでした。そして、私達は昭和十九年三月輸送船七隻の船団で横須賀を出港しました。私達には何処に行くのか解りませんでした。ところがすでに戦況は敗戦の色濃く、海も敵潜水艦の跳梁は我が本土の近海まで迫っていました。

従って、私達の船団が観音崎を過ぎて早くも嚴重な見張りをしなくてはならず、五分交替で見張りをし進行了しました。やがて先方に父島が午後の陽射しの中に見えた時「雷跡、雷跡」と見張り声、上甲板にいた私は五、六条の白波を立てこの船に向って来るのを見た瞬間、船橋で「取り舵一杯」の号令で船は魚雷と魚雷の間に「ググッ」と向きを変えて入りました。魚雷は両舷をかすめて過ぎました。私は只呆然としてその操舵術の見事さに感心するとともにホット胸を撫で下

ろしました。

それから、此の先には進めないとの事で徹夜で荷降ろし作業に掛かりました。すると今度は空襲になりました。夜を徹しての執拗な敵機の攻撃に船団は湾を出て近海に逃れましたが、すべて撃沈されました。そして島の切り通しの防空壕を見ると空襲での負傷者や戦死者で一杯となり苦しもうめく者、すでに息を絶えている者、正に生き地獄の状況でした。私は初めて戦争の恐ろしさで凄惨さを目のあたりにいたしました。

それから幾日か敵の様子をうかがい機を見て夜行で小舟で硫黄島に上陸しました。島に着くとやたらと友軍機の残骸ばかりでした。私達はその片付けと飛行場の爆撃の穴埋めと整備が仕事でした。友軍機は二、三機でその後は遂に一機も補充はありませんでした。皆一様に友軍機の飛来を今日は来るか、明日は来てくれるのか待っておりました。その間も敵機の空襲は度を増し、加えて艦砲射撃も熾烈を極めてきました。その度に負傷者が出、銃撃に倒れる者が出てきました。そうした状況の中で、応召されて来た年輩の兵隊さんは毎日泣いて居りました。私の隊の専任下士官もその一人で空襲になると一目散に防空壕に逃げ込んで行く、これが負け戦の実態です。

今、私達が妻子を置いて戦に出て何時も死を目前にしておればきつと同じであろうと思います。当時私はそうした中で案外冷静で余り恐ろしい、怖いという事を思いませんでした。それは若かった故であつたでしょう。戦は若者でなければ戦えません。こんな事もありました。分隊で滑走路の整備中空襲になり小さい防空壕に入っていた時、上官が「此処は危ないから二、三人ずつ逃げ出せ」との事で、私が先ず飛び出して浜の方に駆けました。ふと見ると後ろから一人の兵が「待

つてくれ」と云つて泣き出していました。仕方がなく小さい木の陰の蛸壺に入りこんで腹這いになって空襲の終わるのを待った。つくづく戦争は若い者でなければと思った。その補充兵の顔は今でも忘れられない。

そうした中、九月頃であつた硫黄島守備隊最高司令官栗林中将、海軍総司令官市丸海軍大佐は、陸海軍全員を集め決死の訓示をされました。「遂に祖国日本の防衛の最前線は此の島となつた。此の島が敵の手中に落ちれば此処を基地として、本土の空襲と上陸を容易にする、全軍玉砕して此の島を死守すべし」と訓示をされました。私も或いは自決用なのか手榴弾を一発渡されました。此の時ばかりはさすがに胸がしめつけられるようでした。その後は敵の攻撃はその度を加え海からも、空からも休みなく続けられ特に島を一巡しての艦砲射撃は身の毛も縮む思いでした。終わって悠々と島を離れて行く敵の艦隊を木陰で見ている時の悔しさは何も譬えようがありませんでした。

私はふとしたことで医務室に行つた折、左右胸膜炎と診断され内地送還を命ぜられ敵の攻撃の間を見て帰れとのことでした。十日間位医務室の防空壕に入室しておりました。ここも戦死者と負傷者で一杯でした。やがて「明朝舟が来るので支度せよ」との事でした。しかし、私が一番若い兵であり皆帰りがたつて泣いている人の前に何で挨拶が出来るでしょうか、大変悩み複雑な思いでした。それ故に友人、先輩にも言葉もかけず夜そつと荷物を纏めて早朝一目散に浜辺に向つて駆けだしました。

舟は小さな木造船でした。途中二、三度敵機の攻撃を受けましたが小舟が故に逃げる事が出来
ました。着いた所は横須賀海軍病院の一室でした。今考えれば、何で此のような戦をせねばなら
なかったのでしょうか。私の兄は遂に帰っては来ませんでした。